報告

環境教育の視点でみた「大淀川学習」の意義

小林　辰至*，柚木崎　敏**，女子分　博恭**，和田　政吉**
＊　宮崎大学教育学部附属教育実践研究指導センター
＊＊宮崎市教育委員会

Studies of the Significance of the "Study of the Oyodo River" from the Viewpoint of Environmental Education

Tatsushi KOBAYASHI*, Satoshi YUKIZAKI**, Hiroyasu ZYOSIBUN** and Masayoshi WADA**
＊ The Center for Educational Research and Practices, Faculty of Education, Miyazaki University
＊＊Miyazaki City Board of Education

（受付日　1992年12月16日・受理日　1993年5月11日）

The "Study of the Oyodo River" is a comprehensive learning promoted by the Miyazaki City Board of Education. The unit is organized using materials dealing with the Oyodo River flowing through the City of Miyazaki. The content of the learning emphasizes the firsthand experience and activities on the part of pupils and is designed for first and sixth graders.

A large part of the materials of the "Study of the Oyodo River" are dealt with from the viewpoint of environmental education. We rearranged these materials in the framework of environmental education and established such units as "Our Living and Garbage" and "Quality of Water and Aquatic Animal".

Key Words : Environmental Education, Teaching Materials, Proto-experience

はじめに

近年，地球温暖化，オゾン層の破壊，熱帯雨林の減少など環境問題に関して国際的な世論の高まりがある。このような環境問題に対して，具体的な行動がとれるよう人々の意識を啓発することが必要なことは言うまでもない。しかし，地球規模の問題を環境教育の視点で取り上げ，幼児や小学校低学年の子どもに提示しても，自分との関わりを持たせにくかったり，いたずらに不安感を抱かせたりして，環境教育の目的を充分に達成することは難しいと思われる。環境教育は生涯学習の視点で，幼児期から成人にいたるまでその発達段階に応じた内容で取り組むことが必要である。

環境教育の出発点は，地域の自然的・社会的環境であり，地域の素材を教材化した地道な実践が望まれる。宮崎市には「大淀川学習」とよばれる地域の素材をもとにした総合学習が計画的かつ組織的に実践されており，その中には環境教育の素材としてすぐれた内容が多い。

本報では，地域学習としての「大淀川学習」で取り上げられている素材を吟味し，環境教育の視点で分類，再編成するとともに，その意義について述べる。

〔問い合わせ先〕〒889-21　宮崎市学園木花台西１－１　宮崎大学教育学部

Ⅰ．大淀川学習について

「大淀川学習」は昭和61年から宮崎市内の全小学校が取り組んでいる総合学習である[1)~6)]。「大淀川学習」では大淀川にまつわる素材を発掘，教材化し低学年，中学年，高学年用の副読本を作成し活用している[7)~9)]。

「大淀川学習」企画の背景には，社会や自然環境の変化，それにともなう子どもの生活体験の変化の実態がある。宮崎市教育委員会発行「大淀川の教材化と指導計画」[10)]では大淀川の教材化の意図について「急速に進歩した現代社会において，地域における児童生徒の生活には大きな変化が生じている。地域の自然も変化してきたし，地域の人々の暮しをみること，地域の行事に参加するなどの体験が少なくなってきている。そして，じっくり落ち着いて地域の昔を思い，その変化をみつめ，将来を思う機会も少なくなってきている。私たちは，いま郷土の現状に目を向け，地域の環境条件を生かして児童生徒の体験の幅を広げ，より具体的な事実に基づいて考えさせ，児童の生活や体験に密着した教育の内容と方法を工夫しなければならないと思う。」と述べている。また，大淀川の教材を教育課程に位置づける意義として，①大淀川そのもの及び大淀川に付随する事実や事象，あるいは人々の生活とのつながりに直接・間接に触れることによって，地域を見つめる目と，関心を持とうとする態度を育てることができる，②過去・現在の大淀川と人々のくらしについて理解し，自然と人間生活との調和を図っていこうとする態度を育てることができる，③大淀川に対する深い理解の上に，愛着を抱き，河川保護・大淀川浄化への積極的な態度を育てることができる，④日常生活の中で，積極的にいろいろな面から大淀川とのかかわりを持とうと努力し，生活に変化とうるおいを求めようとする態度を育てることができる，を上げている。ここで述べられているように「大淀川学習」の意義は，大淀川にかかわる種々の事物・事象との直接体験を通して理解を深め，感性をみがき，態度を育てるという点であろう。これは，換言すれば郷土愛を育むことでもあり，「大淀川学習」の根幹をなすものである。

従来の教科の枠組みでは，ややもすれば知識偏重になりがちであり，体験の少ない現在の子どもに生きて働く知識や技能を身につけさせにくい傾向がみられるが，「大淀川学習」はその点を改善した総合学習といえる。上述した，「大淀川学習」の意義は，環境教育の視点でみても重要な内容を含んでいる。

Ⅱ．発達段階に応じた環境教育の必要性について

環境教育は幼児から高齢者にいたるまでのすべての発達段階において，生涯教育の視点で行うことの必要性が強調されている。これは，環境教育では単に知識や技能の習得にとどまらず，具体的な行動にまで高められることが要求されているため，長い時間をかけなければ目標の達成が困難であることによるものであろう。環境教育を系統的に，かつ効果的に推進するためには，発達段階の特性に応じた内容でなければならない。

そこで，「大淀川学習」で取り上げられている素材を環境教育の視点で再編成する手がかりを得ることを目的に，発達段階の行動の特性やエリクソンの発達課題[11)]を検討してみる。なお，エリクソンの発達観は，人は乳児期から老年期までのそれぞれの段階で，心理的社会的問題に直面し，その時その時の葛藤を克服することによって自我が成長していくとし，人の一生のすべての発達段階に独自の意味と価値を認めるものである。このような発達観は，環境教育を生涯教育の視点で位置づける上で意義深いものがある。

人の発達段階とそれに応じた環境教育の内容等を表1に示した。人の発達段階を便宜的に，誕生から1歳までを乳児期，1歳から6歳までを幼児期，6歳から12歳までを児童期，12歳から22歳までを青年期と区分することにする。以下，この区分にもとづき発達段階の行動の特性や発達課題を検討する。

乳児期は，触れる，見る，聞く等の感覚が発達し，身の回りの物でいろいろな体験をし始める。この乳児期は物をつかんだり手あたりしだいに口に持っていこうとしたりする。また，たたく，投

表1．発達段階と環境教育の内容

発達段階	乳児期	幼児期	児童期	青年期
環境理解の段階		感性的な理解	具体的な理解	抽象的な理解
環境教育の具体的な内容の例		◎自然物や自然事象との原体験 ・水で遊ぶ ・草で遊ぶ ・虫で遊ぶ ・石で遊ぶ等	◎自然物の採集 ・昆虫，植物，化石，石等 ◎生物とその生活環境 ・ホタル，カブトムシ等 ◎物質（資源）の循環等 ・水，紙，アルミ缶等	◎持続可能な開発と環境保全 ・熱帯雨林 ・南北問題 ◎未来の予測 ◎地球規模での自然観等
エリクソンの発達課題	基本的信頼観・自立心の形成		勤勉性の形成	主体性の形成
発達課題に基づく具体的な行動の事例	・人間関係の基礎づくり ・しつけ（ごみの捨て方等）等		・アルミ缶，新聞紙，牛乳パック等の回収等	・地域社会の行事への参加 ・ボランティア活動への参加等

げるといった破壊行為をするようになるが，これは「探究心」の萌芽的な行動といえる。身の回りにいろいろな物を置いて，体験が充分にできるような配慮が必要である。

幼児期は，生活習慣の確立・母子分離・自立が行われ活動的になる。野外での遊びも増え感性もよく育つ時期なので，川に入って水に触れたり，石を投げたり，木に登ったり，動物や植物を捕ったりして遊ぶ自然の中での原体験の場が必要である[12]。この時期は，体験することそれ自体に意義があり，環境教育の視点でみると「環境の感性的な理解」の時期である（表1）。乳児期から幼児期に達成しなければならない発達課題は「基本的信頼関係」，「自立心の形成」などである。特に，母と子の信頼関係は以後の人間関係の基礎となるものであり環境教育を進める上でも重要である。自立が行われると自分のことは自分でしようとするようになる。このとき子どもは本性的にゴミは捨てようとする。ゴミを身の回りにむやみに捨てさせないことは，家庭での環境教育の第一歩であり，これはしつけとして行うべきことである。

児童期は，昆虫をはじめ植物や石，木の実などを集めるようになる。同じ物を集めたり分類したりすることは，自然の多様性を理解することにつながる。この時期は具体的な事物・事象について論理的に思考できるようになるので，ホタルなど身近で具体的な動植物について，その生活史や生息環境を考えたり活動する場を設定すれば，環境について具体的な理解をはかることが可能となる。児童期は「環境の具体的な理解」の時期といえる。

表2「大淀川学習」素材一覧表

教科 学年	国語	社会	理科	生活	音楽	図画工作	家庭
1年	◎大淀川での遊び ◎民話「おなら売り」			◎はるがいっぱい ・くさばなでどんなあそびができるかな ◎ぼくもおよぎたいな ・ささらぎすいろはたのしいよ ◎たのしいおまつり ・ワッショイワッショイおまつりだ ◎バッタみつけた ・むしはともだち ◎水のはやくさのみをつかって	◎ひらいたひらいた ◎はよきはよき ◎大なみ小なみ ◎おじょうさん ◎通りゃんせ ◎梅と桜と ◎すけこんこん ◎一二三 ◎泣こかいとぼかい ◎たなばたさま	◎大淀川の生き物	
2年	◎大淀川遠足のおもいで ◎伝説「水かけ地蔵さん」 ◎伝説「網掛観音」				◎霧山御所から ◎日向ぼっこさん ◎ことひのつばなは ◎つばなつばな ◎佐野のおさるさん	◎川の石	
3年	◎大淀川遠足 ◎民話「宝の下の鶴 ◎民話「ひょうすんぼ」 ◎大淀川にかかる橋 ◎大淀川堤防 ◎大淀川での遊び ◎毛筆習字「かわ」	◎宮崎市の位置 ◎学校の近くの川とその周りの様子 ◎大淀川と宮崎市の地形 ◎宮崎市の生産物と大淀川 ◎大淀川下流に栄えた市街地 ◎大淀川水系須木村のくらし ◎橋橋小戸の渡し ◎俳人墓地	◎春の生き物 ◎夏の生き物 ◎秋の生き物 ◎冬の生き物		◎おしろのさん ◎からす勘三郎 ◎ちょうちょとまれ	◎まつり宮崎	
4年	◎民話「跨江の半びどん」	◎下北方浄水場 ◎宮崎終末処理場 ◎小松川の浄化 ◎大淀川第1・2発電所 ◎九州電力宮崎制御所 ◎ダムのゴミ ◎水防倉庫 ◎水位観測所 ◎排水ポンプ ◎堤防 ◎水門 ◎下水道 ◎樋渠 ◎祖島邦成 ◎高木原開田	◎大淀川とその支流		◎れんすいれんすい ◎一五夜んお月さん ◎よんべえびすこに ◎あがったあがい目 ◎トン屋のトン助	◎いかだくだり	
5年	◎大淀川浄化運動 ◎伝説「人丸と祭清」 ◎毛筆習字「花火大会」,「川くだり」等	◎綾川用水と野菜づくり ◎綾川の鯉の養殖 ◎大淀川の汚濁と浄化運動 ◎大淀川の流れと宮崎平野	◎大淀川の水生生物		◎ちにれちにれ ◎ぼんがえんお父ちゃんな ◎べぶん子が一びき ◎坊さんしのぶは	◎大淀川にかかる橋	◎洗剤と公害 ◎家庭汚水とごみ処理 ◎清掃とごみ処理
6年	◎大淀川を詠んだ短歌 ◎大淀川と私たちのくらしとの結びつき ・上下水道 ・農業用水 ・ダム ・発電所 ・橋 ・憩いの場 ・水産資源 ・交通路	◎宮崎平野の遺跡や古墳 ◎赤江港	◎大淀川の堤防や川岸の植物の群落 ◎宮崎潟群 ◎宮崎平野（隆起海岸平野） ◎宮崎平野の自然堤防 ◎一ツ葉の海岸砂丘		◎おねっこかっこ ◎がんがんわたれ ◎大淀川旅情	◎大淀川の情景	◎洗濯用洗剤の使い方 ◎家庭汚水とごみ処理の仕方 ◎水の使い方と節水

この時期の発達課題は「勤勉性の形成」であることから，アルミ缶などのリサイクル運動に参加させ，物を大切にする気持ちと態度を体験を通して育成することが可能である。

青年期は，仮説，演繹的な思考をする時期であり，仮説をたててそれを検証したり，問題を体系的に解決したりするようになる。哲学や政治，社会の問題など，それまでに体験したことのない事物や事象に対して抽象的に思考できるようになる。青年期は「環境の抽象的な理解」の時期と言える。この時期の発達課題は「主体性の形成」であり，社会における自分の位置を確立し，社会的責任を負うようになる。地域社会での行事やボランティアへ参加し，その活動を通して地球環境や国際社会の認識を深めることが大切である。

以上のように環境教育の内容は，ある発達段階のその時期でなければ効果的に扱えないものもある。このことは，環境教育教材の開発や実践において重要な視点である。

Ⅲ．「大淀川学習」における環境教育に関連する素材

環境教育の目的や内容は幅広く多岐にわたっている。例えば，環境教育についてベオグラード憲章では，「環境とそれにかかわる問題に気づき，関心を持つとともに，当面する問題の解決や新しい問題の発生を未然に防止するために，個人及び集団として必要な知識，技能，態度，意欲，実行力などを身につけた人間の育成」と述べている[13]。また，文部省環境教育指導資料[14]では，「環境教育の目的は，環境問題に関心をもち，環境に対する人間の責任と役割を理解し，環境保全に参加する態度および環境問題解決のための能力を育成すること」と述べている。このように目的や内容が多岐にわたる環境教育において，具体的にどのような内容を取り上げるかについては，まだ検討段階といえよう。

以上の点をふまえ，宮崎市教育委員会発行の小学校教育課程資料「大淀川の教材化と指導計画」[10]及び「大淀川の学習　副読本　指導資料」[15]をもとに，各学年及び各教科で取り扱っている素材を一覧表にまとめ表2に示した。以下に，表2をもとに環境教育として取り扱えると思われる素材を各学年ごとに検討してみる。

1，2年生の生活科では，「はるがいっぱい」，「ぼくもおよぎたいな」，「バッタみつけた」，「木のはやくさのみをつかって」が取り上げられている。環境教育の基盤となるのは自然と五感で触れ合う体験である。小学校低学年において，大淀川の河川敷に分布する植物やそこに生息する昆虫などと五感で触れ合う体験学習を位置づけることは，自然離れが進んでいると思われる現在の子どもにとって，意義のあるものである。山田卓三ら[16]は，触覚・嗅覚・味覚をともなった自然とのふれ合い体験を従来の直接体験とは区別して原体験（Proto-experience）とよび，感性，意欲，判断力など人間として生きる力を育成するうえで重要な体験であると述べている。「大淀川学習」の生活科で取り上げている素材は原体験を含むものであり，環境の感性的な理解をめざしたものといえる。大淀川で泳いだ幼い頃の体験は，やがて大淀川の水がいつまでもきれいであってほしいという願いや積極的に環境保全を行う行動につながるものである。従来の学校教育では，原体験的な内容は教育的にはあまり意味がないものと考えられていたように思われるが，その重要性を再認識し環境教育の基盤として位置づけることが必要である。

3年生の社会科では「大淀川と宮崎市の地形」が環境教育の素材として取り扱えると思われる。この素材は，現在の地域の地形が大淀川の侵食作用や堆積作用など地質学的な活動の結果形成されたことを理解させるうえで意義がある。環境問題の出発点として忘れてはならないことは，自分たちの住む地域にまず目を向けるということである。地域の自然と人間との関わりを考える視点は，地域の中で体験を通して育成されるべきである。体験を基盤に地域の自然をみる視点が法則化されたり一般化されたレベルにまで高められたとき，この視点で世界のどこの国の自然でもみることができるし，地球規模で環境問題を考えることができるようになる。環境教育は地域の環境から始めて，地球規模での環境問題を考え，そして地域で

具体的な環境問題に行動として取り組めるようになることが理想的である。環境問題のキーワードは，"Think Globally, Act Locally"[17]と言われる由縁はここにあると思われる。理科で取り上げられている「春の生き物」，「夏の生き物」，「秋の生き物」，「冬の生き物」も同様に，地域の自然を具体的に理解する上で意義がある。大淀川流域の地形やそこに生息する動植物を素材として取り上げることは，「環境の具体的理解」の段階である。

4年生の社会科では「下北方浄水場」，「宮崎終末処理場」，「小松川の浄化」，「大淀川第1，2発電所」，「ダムのゴミ」，「水位観測所」，「排水ポンプ」，「堤防」，「水門」，「下水道」などが素材として取り上げられている。これは，小学校指導書社会編[15]において4年生の社会科で取り扱う内容として，「地域の人々の生活にとって必要な飲料水，電気，ガスなどの確保及び廃棄物の処理についての対策や事業が計画的，協力的に進められていることを見学したり調べたりして，これらの対策や事業は地域の健康な生活の維持と向上に役立っていることを理解できるようにする。」と述べられているが，「大淀川学習」の素材はこれによく合致している。また，同指導書ではさらに飲料水を題材として扱う場合，「飲料水の確保のための対策や事業については，安定供給のための工夫や努力と広く他地域の協力を得ていることを取り上げ，それが，計画的，協力的に進められていることを調べ，飲料水の確保の対策や事業は地域の健康な生活の維持と向上に役立っていることを理解させること」と述べている。これらの指導目標は，社会科教育の視点で述べられたものであるが，環境教育の視点でみると，知識・理解をもとに水質をきれいに保つための具体的な行動，例えば調理汚水を流すときに油類は新聞紙などに吸収させるなどといった行動に発展しなければならない。4年生の時期の発達課題は「勤勉性」であることから，上述のように水を日常生活とのかかわりの中で考え，具体的な行動の変容を目的とした学習内容は，環境教育の素材としても適したものであるといえる。理科で取り上げている「大淀川とその支流」は，大淀川の流水のはたらきや上流，中流の自然状態を理解させることを目的としている。この素材は，3年生で扱う「学校の近くの地形」，「大淀川と宮崎市の地形」との関連性が高く，環境教育の出発点である地域をよく理解させることを目的とした意義のある素材といえる。

5年生の社会科で取り上げられている「大淀川の汚濁と浄化運動」及び理科で取り上げられている「大淀川の水生生物」は，環境教育の視点で極めて整合性のある素材である。すなわち，大淀川の汚濁状況を生物指標を用いて科学的に調べた体験学習をふまえ，いかに行動すべきかという視点で浄化運動へと発展させることができるからである。5年生の発達段階をふまえ，このような素材が構造化されれば，具体的な事象を通した，環境の論理的な理解が可能となろう。

6年生の社会科では，環境教育の視点で取り上げられる素材は見あたらない。理科では「大淀川の堤防や川岸の植物の群落」，「宮崎層群」，「宮崎平野」，「宮崎平野の自然堤防」，「一ツ葉の海岸砂丘」が素材として取り上げられている。「大淀川の堤防や川岸の植物の群落」は生態学的な視点で地域の自然を見る学習が可能であり，やがて中学校や高等学校でのグローバルな地球観形成につながるものである。「宮崎層群」，「宮崎平野」等は，地域の地形形成を地質学的な時間のスケールで扱う内容であり，やはり中学校や高等学校でのグローバルな地球観形成につながるものである。

また，全学年で取り上げられている童歌や伝説なども，地域の文化や伝統に愛着をもたせるなど感性を育てる上で意義があると思われる。

Ⅳ.「大淀川学習」の環境教育の視点での再編成とその教育的意義

環境教育としての「大淀川学習」の素材がどのようなカテゴリーで再編成できるかを検討した。その結果，「原体験」，「文化・伝統」，「自然史」，「自然保護」，「環境汚染」，「開発・産業」，「資源」，「エネルギー」の8つのカテゴリーを設定した。さらに，このカテゴリーに学年の軸を加えたマトリックスを作成し，「大淀川学習」の素材を配列した（表3）。これらをもとに設定できる単

表３．環境教育の枠組みへの「大淀川学習」の素材の位置づけ

枠組み		原体験	文化・伝統	自然史	自然保護	環境汚染	開発・産業	資源	エネルギー
学年	1・2	◎草花を用いた遊び ◎川での水泳 ◎虫とり ◎木の葉や実での遊び ◎河原での石遊び	◎わらべ歌 ・つばなつばな ・すけこんこん ・とおりゃんせ ・梅と桜と ・日向ぼっこさん等 ◎祭り ◎伝説 ・「水かけ地蔵さん」 ・「網掛観」						
	3		◎わらべ歌 ・おしろのさん ・からす勘三郎 ・ちょうちょとまれ ◎大淀川下流に栄えた市街地 ◎大淀川水系須木村のくらし ◎橋梁小戸の渡し ◎俳人墓地 ◎民話 ・「宝の下の鶏」 ・「ひょうすんぼ」	◎春の生き物 ◎夏の生き物 ◎秋の生き物 ◎冬の生き物 ◎大淀川と宮崎市の地形					
	4		◎民話 ・「跡江の半びどん」 ◎わらべ歌 ・れんすいれんすい ・一五夜んお月さん　等	◎大淀川とその支流		◎ダムのゴミ ◎小松川の浄化 ◎下水道 ◎宮崎終末処理場	◎大淀川第１・２発電所	◎下北方浄水場(水道水)	◎大淀川第１・２発電所
	5		◎伝説 ・「人丸と景清」 ・「景清と生目神社」等 ◎わらべ歌 ・うにれうにれ ・べぶん子が一びき　等	◎大淀川の水生生物 ◎大淀川の流れと宮崎平野	◎大淀川浄化運動	◎洗剤と公害 ◎調理汚水とごみ処理 ◎清掃とゴミ処理	◎殺川用水と野菜づくり		
	6		◎わらべ歌 ・おねっこかっこ ・がんがんわたれ等 ◎大淀川を詠んだ短歌 ◎宮崎平野の遺跡や古墳	◎大淀川の奨防や川岸の植物の群落 ◎宮崎層群 ◎宮崎平野 ◎宮崎平野の自然奨防 ◎一ツ葉の海岸砂丘		◎洗濯用洗剤の使い方 ◎調理汚水とごみ処理の仕方	◎大淀川と私たちのくらしとの結びつき ・ダム ・発電所 ・交通路	◎大淀川と私たちのくらしとの結びつき ・水産資源	

表4．大淀川学習の素材をもとに発達段階をふまえて設定した環境教育の単元及びその内容

学年	単元名	内容
低学年	春と遊ぼう 夏と遊ぼう 秋と遊ぼう 冬と遊ぼう	原体験的な内容 ・石体験（石を投げる，石を積む，きれいな石をさがす，石で書く） ・土体験（素足で土に触れる，土のぬくもりと冷たさ，土を掘る，土をこねる） ・水体験（雨にぬれる，自然水を飲む，水かけ遊び，浮かべる，川をわたる，川で泳ぐ） ・草体験（草むらを歩く，草をぬく，草をちぎる,草のにおいをかぐ，草を食べる，草で遊ぶ＊） ＊オオバコの草ずもう，レンゲソウの風車，スズメノテッポウの笛，クズの葉を鳴らす，シロツメクサの冠等
中学年	季節の変化と動植物	・季節の変化にともなって消長する動植物の種類を生物暦にまとめたり季節ごとに校内の動植物分布図を作成させる ・四季を通してみられるタンポポなど特定の種について生活のようすがどのように変化するか観察させる
	大淀川水系の人々のくらし	・大淀川の流域に住む人々が，川からどのような恵みを受けながらくらしどのような生活の知恵を身につけてきたかをゴロリ魚法などを例に考えさせるとともに川などの地形によりその地域特有の生活の仕方があることを調べ学習を中心に展開する。
	水資源確保のための人々の努力	・水を資源という視点でとらえ，飲料水の安定供給や水力発電のためのダム建設などの開発や水資源確保のための森林保護の必要性などあい矛盾するテーマを設定し，開発と保全のあり方，その困難さ等を題材として扱う
	私たちの生活と水道	・水道水と汚水をテーマとして取り上げ，自分たちの生活が多くの人々の努力によって快適なものになっていること，また快適な生活をすることによって自分自身が汚水を出し環境を汚す存在であることを題材として扱う
高学年	私たちの生活とゴミ	・日々の生活により種々のゴミが発生しており，自然物のように自然に返せるゴミ，プラスチック類などのように自然に返せないゴミ，アルミ缶などのように再利用できるゴミがあることを題材として扱う
	水質と水生生物	・カワゲラやカゲロウの幼虫などの水生昆虫，サワガニ，プラナリアなど水質の指標生物を調査したり，その結果を水質と関連づけさせる。
	宮崎平野のおいたち	・市周辺にみられる砂岩とでい岩，清武町や高岡町の地層に含まれる化石などを手がかりに，地質学的な視点で宮崎平野のおいたちを探究させる。

元は，例えば，低学年では原体験を取り入れた「春（夏，秋，冬）と遊ぼう」，中学年では「大淀川水系の人々のくらし」や「水道と私たちの生活」，高学年では「私たちの生活とゴミ」，「水質と水生生物」などが考えられる（表4）。

地域の素材による環境教育は，幼児期から発達段階にあわせて，体験を通した学習を計画的に行うことが可能である。また，教育委員会や行政が連携をとりながら推進することにより，学校教育終了以降の生涯教育や社会教育にまで発展させることが可能である。「大淀川学習」のように，地域の素材による地域に根ざした環境教育をすすめる意義はここにあると考える。

おわりに

「大淀川学習」は，総合学習の視点で昭和61年以来実践されてきたものであり，教材化も進んでいる。今後は，これらをふまえ，環境教育の視点で目標分析を行い環境教育としての「大淀川学習」の一層の充実をはかりたい。

参考文献

1) 宮崎市教育委員会（1986）大淀川教材化の実践事例集。
2) 宮崎市教育委員会（1988）大淀川学習の実践事例（第2集）。
3) 宮崎市教育委員会（1989）大淀川学習の実践事例（第3集）。
4) 宮崎市教育委員会（1990）大淀川学習の実践事例（第4集）。
5) 宮崎市教育委員会（1991）大淀川学習の実践事例（第5集）。
6) 宮崎市教育委員会（1992）大淀川学習の実践事例（第6集）。
7) 宮崎市教育委員会（1987）大淀川の学習低学年副読本　わたしたちのおおよど川。
8) 宮崎市教育委員会（1987）大淀川の学習中学年副読本　みんなの大淀川。
9) 宮崎市教育委員会（1987）大淀川の学習高学年副読本　母なる大淀川。
10) 宮崎市教育委員会（1986）大淀川の教材化と指導計画。
11) 黒田実郎（1988）現代子ども百科，P．208，中央法規。
12) 小林辰至・雨森良子・山田卓三（1990）幼児期における原体験，関西教育学会紀要，Vol．14，P．143～150。
13) 山田卓三（1992）環境教育事典，P36，東京堂。
14) 文部省（1992）環境教育指導資料（小学校編）。
15) 宮崎市教育委員会（1992）大淀川の学習副読本　指導資料。
16) 山田卓三他（1989）学習の基礎としての原体験，日本科学教育学会年会論文集13，P．119～120。
17) 福岡義隆（1992）人間的尺度の地球環境，P．2，古今書院。
18) 文部省（1992）小学校指導書社会編，P．29～30

〔資料紹介〕

◇「自然と人間を結ぶ――自然教育活動24」（農文協、1993.5.）

この号では「〈食と農〉をどう教えるか」という特集を組んでいる。環境教育の視点から食や農業を考えさせることの必要性やその実践活動の様子などを載せられている。都会の子供に自然体験ばかりでなく、農業体験も大切であり、環境教育に携わるものは是非読んでほしい資料の一つ。

◇「生活と環境」Ｖｏｌ．38，№5（1993.5）

この号では、環境教育について特集が組まれ、環境教育の基本理念についての論文をはじめ、各立場（学校、生活協同組合、環境行政、地域住民など）での環境教育の実践活動の様子などが載せられている。また、本学会の活動についての記事もある。　　㈶日本環境衛生センター発行